

紙ふうせん

KAMIFUSEN NO.50

成田市立図書館だより 第50号 2002年（平成14年）1月30日発行

編集 成田市立図書館 〒286-0017 成田市赤坂1-1-3 ☎ 0476-27-4646
FAX 0476-27-4641



2F展示コーナーにおいて市史講座「佐倉惣五郎と宗吾信仰」の特集を行いました。

市史講座

「佐倉惣五郎と宗吾信仰」

鏑木行廣氏



講師の鏑木先生は、佐倉惣五郎の研究を15年にわたり続けられ、さらに各地に祀られた宗吾信仰について現在までに30か所余り把握され、その内20か所を踏査されている。

義民として名高い惣五郎の伝承は、さまざまな物語として伝えられているが、中でも広く知られているのは「地藏堂通夜物語」である。惣五郎の存在については長い間論争が続いていたが、昭和33年に刊行された児玉幸多氏の『佐倉惣五郎』（吉川弘文館刊）で、惣五郎という上層の農民がいたことが史料により証明されている。また、事件の時期や要因についても諸説がある。時期につ

いては承応年間説、正保説、寛文説などがあり、要因については、過酷な年貢、利根川の付け替え、隠し田摘発のための検地、千葉氏再興などの説がある。

講演では、これらの問題を史料に基づき具体的に説明された。まず事件の時期については、江戸幕府が四代将軍家綱の頃であり、なおかつ佐倉藩主が堀田氏の時代であることを考えると、やはり承応年間と考えられるとした。さらに要因については公津村の分村が重要であると強調された。公津村は承応2年に台方・下方・江弁須・大袋・飯仲の5か村に分村され、翌3年の検地により157石増の1338石となった結果、年貢量が増えたことを史料で示された。分村の動きが起こった時点で、年貢負担の増加を恐れて惣五郎が何らかの行動を起こしたことは、十分考えられる。なお、直訴であったか否かは関係する資料が確認されていないので明らかではない。

惣五郎が義民として一般に広く知れ渡ったのは、堀田氏の対応と芝居の影響によると考えられる。堀田正信は惣五郎を慰霊するため、承応3年に大佐倉村の将門山に石の鳥居を寄進している。その後の佐倉藩主稲葉氏の家臣である磯辺昌言が著した『総葉概録』には、堀田氏を恨んで死んだ惣五郎の怨霊の記載もある。さらに、後の佐倉藩主が戒名や院号を贈ったり、惣五郎の子孫に土地を与えるなど、一領民に対する処遇としては破格の扱いをしていることや、嘉永年間に惣五郎を扱った芝居が大当たりしたことを『藤岡屋日記』の記載を例に紹介された。

最後に各地に祀られた宗吾信仰について、一揆や訴訟の際に拠り所として祀った例などを体験談を交えて紹介された。伝承や史料の断片の中から史実を探求する喜びが伝わる講演会であった。

一般文学講座

「風土と虫と人の文明」

奥本大三郎氏

フランス文学者にして稀代の昆虫愛好家でもある奥本大三郎先生は、1944年3月6日大阪で生まれました。現在は埼玉大学で教鞭をとられるかたわら、日本昆虫協会会長として活躍されています。

先生が子どもの頃は、自然に恵まれていたこともあり、多くの生き物たちが身のまわりに棲息していました。特に一番身近にいたものは「昆虫」でした。トンボやチョウ、カブトムシなどと触れ合う感動が忘れられず、そのことが「昆虫の世界」へ足を踏み入れていくきっかけとなったようです。

昆虫の世界を研究するため、日本ばかりでなく世界各国を巡るうちに、先生はあることに気がついたそうです。それは、『面白いことに、世界の各地域ごとに、虫や鳥の姿形、色彩に、それぞれ一定の傾向があり、しかもそれがその土地に住む人の造り出すものと似ているところがある』という点です。

講演では、先生は沢山のスライドを持参され、時間の許す限り私たちに見せてくださいました。タイの寺院のデザインが、実際にタイに棲息する甲虫こうちゅうの仲間とその形態が大変良く似ていること、美しいチョウの数々、大英博物館に取められている精巧に作られた昆虫の工芸品など、冗談を交えながら一つ一つ説明してくださいました。およそ2時間、私たちは昆虫の不思議な世界を旅したようでもありました。

先生は「フェーブル昆虫記 全8巻」(集英社刊)の編訳をはじめ、昆虫に関する多くの著作を執筆されています。エッセイから子ども向けの読み物まで多岐にわたっておりますので、ぜひ皆さんも一読されてみてはいかがでしょうか。



講座に関連する本

◆佐倉惣五郎と義民信仰について

『佐倉惣五郎と宗吾信仰』 鏑木行廣著 崙書房

『成田市史 中近世編』 『成田市史 近世編史料集Ⅲ産業文化』

『成田市史研究』 8・14・19・20号など

◆奥本大三郎氏の本

『虫の宇宙誌』 青土社 『ホタルがひかっている』 福音館書店

『楽しき熱帯』 集英社 『虫の春秋』 読売新聞社 ほか多数

児童講座

「電気パン焼き器でホカホカパン —イオンってイーモン?—」

坂口 美佳子 氏 (科学読物研究会)

今年の科学遊び講座は、7月27日（金）に「電気パン焼き器でホカホカパン—イオンってイーモン?」と題して行われました。イオンとは何か、またどんなものにイオンが含まれているのかを、仮説を立てることと実際に実験をして確かめることを繰り返しながら学びました。

塩や砂糖にはイオンがあるのか、水に溶かした状態ではどうなのか、しょうゆやソースには入っているのか…?子どもたちは、一生懸命考えて、積極的に考えを述べていました。坂口先生は少数意見の子どもたちの声にもていねいに耳を傾けていらっしゃいました。大切なのは答えが合っているか否かではなく、自分の考え（予想）を持つことなのです。予想をたてることで、その後に行う実験に対する理解もより深まったようでした。

最後に、プラスイオンとマイナスイオンがぶつかりあうと熱が発生する性質を利用して、パンを焼きました。ホットケーキミックスを水に溶かして、牛乳パックとステンレス板で作った即席の「パン焼き器」に流し込んで待つこと5分。香ばしい匂いが会場に広がり、みんなおいしそうに試食していました。



参考になる本

『電気をあやつりおもしろ工作・まいったかコイルの魅力
(NHK やってみようなんでも実験 第3集3巻)』理論社
『砂糖と塩の実験室』高梨賢英著 さ・え・ら書房

展示コーナーの紹介



図書館2階の展示コーナーにおいて、『図書館で見る縄文の美』と題したパネル展示を開催しました。

おもに東北地方から関東・中部地方などの貴重な出土品の写真を中心に、縄文時代の造形の美しさを紹介しました。また、市内から出土した千葉県指定文化財である「人頭形土製品」や荒海貝塚出土の土器などの写真も展示しました。

図書館は、原始美術に関する図書を所蔵していますので、ぜひご利用下さい。

編集後記

今年度の図書館講座にも、たくさんの方々の参加をいただきました。それぞれの分野のスペシャリストのお話からは、学問に対する情熱や研究現場の雰囲気が生き生きと伝わり、著書を読むのとはまた違った楽しさがあります。図書館はこれからも様々な講座を企画していきますので、ぜひご来場ください。

成田市立図書館だより

発行 成田市
編集 成田市立図書館
〒286-0017 成田市赤坂1-1-3
☎0476-27-4646
発行日 2002.1.30
登録番号 成教図549